どうしたら、よいのだろうか？

確かに、今迄、筆者が述べてきたように中学校はまわりの同僚と話せないくらい忙しい。

しかし、それ以上に教師が納得せず、押しつけられる仕事が多く、自己決定できない所に多忙化の問題のネックがあるといえる。

中学教師の民主主義のレベルが、中学の多忙化の本質を握る切り口である。

今できることは、教師一人ひとりが自分の意志で判断できる教育場面を多くすることであり、職場で自分なりに「声」を出すことが多忙化を和らげる近道だと筆者は考えている。

（付記）本文で登場しているB子・M美・C男・S夫・W雄さんは架空の人物である。

（こばやし　あきら＝新潟市藤見中学校）

「新学力観」の訳語

ある必要があって、県の教育庁に電話して聞いた。「新学力観という言葉を文部省は、英語にどう訳しているか、教えて頂きたい」

「どちらさまですか」

「にいがた県民教育研究所という会員制の研究所の所員、○○といいます」

「私どものところには未だありませんね。文部省にきくのが早道ですよ」

こうして文部省に電話した。受付けの女性は、趣旨を聴くと初等中等教育局小学校課につないだ。やがて、若い男性の声になった。

「それは、新しい学習指導要領が目指す学力の考え方のことで、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる……」

えんえんと解説し始めた。適当のところでさえぎって、訳語が知りたいと求めた。

しばらく周りに聞いている様子の後、

「公的の訳語はないと思います。何しろ平成元年に改訂された学習指導要領の英語訳さえ未だ無いのですよ……」

信じがたいことだった。

（Y）